



～年間聖句～「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」コリントの信徒への手紙Ⅱ 5章17節

## インサイドアウト思考

これから激変する現代社会において、みなさんの生きる力を育むために、現在、次期学習指導要領改訂に向けた審議が進められています。資質・能力の3つの柱の1つである「学びに向かう力」を詳しく分析する中で、その根本にある要素として「初発の思考や行動を起こす力・好奇心」が提起されています。

この「初発の思考や行動」は、ある人の言葉を借りれば、「インサイドアウト思考」という言い方になります。最終的な解が見えない状態でも、自身の内なる思考（インサイド）を、他者や社会に向けて外化する（アウト）思考様式です。学校教育では、探究学習の時間や各教科等で取り組まれるパフォーマンス課題などの活用型の学習でこの思考を働かせています。

他方で、各教科等の習得型の学習では「アウトサイドイン思考」を働かせることが多いと言えます。自身の外側（アウトサイド）にある正解や目標に向かって思考や行動を合わせていく（イン）思考様式です。この「アウトサイドイン思考」は学習の基礎・基本であり、決して軽視されなければならないのです。学習において、この「インサイドアウト思考」と「アウトサイドイン思考」は、バランスよく育っていくことが重要だと思います。

思考や行動の「初発」の部分は、「インサイドアウト思考」の本質的な特徴だと言えます。最終的にどのような解にたどり着くかわからなくても、自身の考えや解を生み出そうとすることが、「初発」の本質になります。これからの予測困難で変化の激しい現代社会において、問題を解決するための必須条件になります。考えてみるとそれは「原始的」だと思います。

よく「創造的」という言葉を耳にすると思います。でも「創造的」の手前に「原始的」という言葉を意識してほしいと思います。「創造的」と言うとすごく難しいことを発明して、社会から評価されることと思ってしまうことがあります。みんなが、まず意識することは、そんな大げさなことではなく、誰もが、考えようとする瞬間の「思考の始まり」のことです。それを「原始的」と言っています。つまり「どうなるかわからないから考える」というシンプルな思考のことを言います。思考の原点回帰と言つてもよいと思います。自ら考えようとしているかという態度等を「学びに向かう力」とつなげて、みんなの学習評価をしていくようになります。

「インサイドアウト思考」で、みなさんが一番実感できるのは、「探究（はないち）」の活動だと思います。本校の「はないち」でも、「〇〇大学に、こんな研究をしている先生がいるみたい」という感じで、自分たちが設定したテーマに関わる研究者を自分たちで探し、アポを取り、話を聞く生徒が見受けられます。私が今一番期待する生徒像でもあります。

今の時代、社会に出て活躍する人は、このような体験を学生時代に多く積んでいる人だということがわかっています。だから大学入試等でも評価されます。これからも、好奇心旺盛な女学院生でいてほしいと思います。

（学校長 重枝 一郎）